

ブライアン・ウオードローパーキンス著

(南雲泰輔訳)

## 『ローマ帝国の崩壊』

——文明が終わるといふこと——

富井 眞

文献史学と考古学との更なる関係向上を期待して、しかし歴史考古学の枠組からというよりも考古学全般の論理や方法の観点から、そして解釈多様化も資料増加もそれ自体は研究の深化ではないという認識で、この書評に取り組みたい。本誌や本書の分野横断的性格と、西洋古代史学者の訳者が提示していた考古学との交際方針<sup>①</sup>に鑑みてのことである。原書は、刊行から一〇年を経ている、この間に日本の西洋古代史研究でも話題によくあがっている<sup>②</sup>ので、訳書の書評としては、こうした姿勢での取り組みも生産的だと思ふからである。

本書の主構成は二部八章だが、第一章「そもそもローマは滅んだのか」は序章であり、第一部「ローマ帝国の崩壊」には、第二章「戦争の恐怖」、第三章「敗北への道」、第四章「新しい主人のもとで生きる」、の三章が配分され、第二部「文明の終わり」に

は、第五章「快適さの消滅」、第六章「なぜ快適さは消滅したか」、第七章「ひとつの文明の死とは」、終章と言うべき第八章「この最善なる可能世界において、あらゆる物事はみな最善なのか」、の四章が置かれ、そして補遺 (appendix) 「陶片から人びとへ」となっている。訳書の帯で「史学・考古学双方の研究を駆使」と謳う本書は、実際に、第一部が文献史学的な内容、終章を除く第二部およびアペンディクスが考古学的な内容で、分量的にもおおよそ同程度である。

第一章で、ローマ建築が研究テーマの考古学者を父に持ちローマで生まれ育ったという著者は、蛮族の侵入を被ったローマ帝国が崩壊した後には西方世界は暗黒時代に入る、という伝統的な「衰亡」論が半ば自明だったこと記し、それ故に、一九七一年のピーター・ブラウン著『古代末期の世界』<sup>③</sup>以来の、「鬱然たるローマ帝国の崩壊という伝統的な見方に対する大胆な挑戦」(二二五頁)ともいえる「古代末期」(Late Antiquity)論の浸透、すなわち、ローマ帝国終焉の時期を「変容」の時代として捉えて「宗教的・文化的革命」とかゲルマン民族の「平和的な順応」といった解釈すら提示する考え方の浸透に(二四〇―三二頁)、驚きそして「異議申し立てをしなければならない」(三三頁)と執筆動機を語る。

第一部では、主に埋蔵物でない文書や絵図・記念物といった資料を基に、始めの二つの章でローマ帝国の崩壊までの説明を、住民心理面(第二章)と軍事外交・政治・経済面(第三章)から行い、残りの第四章で崩壊後の解説を再び住民心理面から行う。第二部では、埋蔵物となっていた物質資料を、「証拠」として扱いながら衰亡論をさらに展開する。すなわち、第五章では、帝国西

方の経済状況をローマ期とポスト・ローマ期それぞれについて整理し、時系列的に連続するその二つの時期の資料を定性的に比較して、経済面での異同を「異例なまでの質的变化」（一七七頁）と評価する。そして第六章では、この経済的变化の原因を考察し、いよいよ第七章では、その考察を基に社会・時代・文明全体を見通すのである。

本書で提示した解釈上の試論の「背後にある本質的なもの」の考え方が、今なおきわめて今日的（七頁）だという認識の著者は、第八章では、歴史学の理論負荷性（すなわち、現在と切り離されたように思われる過去を見る際にも、現代までに形成されてきた歴史理論がレンズとなってしまう状況）を意識させながら、「古代末期」論を万事を肯定的に解釈する楽天主義的歴史観として批判しつつ、現代の読者に、ローマのように当代文明を過信する独善に至らぬようにと注意を促す。

本評の方針に沿って第一部から少し詳しく見る。蛮族の残虐さとそれに怯える五世紀のローマ人を叙述する第二章では、西方の状況については、『セウエリヌス伝』の他には、「良質の叙述史料が欠落して」て「ほとんど詳細が記されていない無味乾燥な年代記の記述に依拠するのがやっと」であり、詳しいことを知るためには説教の小冊子などバイアスがかった文字資料に頼らざるを得ないという（四五―四六頁）。また第三章では、帝国社会の安定・成功のために不可欠な軍の充足は納税者の安定にかかっている（七四頁）と理論的前提を明示する著者の姿勢には好感が持てるが、蛮族侵入と篡奪に揺れた三・四世紀でさえ考古学的成果に

よれば西方も経済的に衰亡していたとは言えない（七四―七五頁）、とした根拠は第二部まで示されずに議論が進む。さらに、「古代末期」論の「魅力的で重要な心理的・精神的世界への研究」（二五〇頁）での議論を意識したであろう第四章では、アイデンティティを一つの鍵概念とし、崩壊後の状況について、「ローマ人はゲルマン民族の主人たちの政治的アイデンティティへ、ゲルマン民族はローマ人の臣下のより洗練された文化的枠組みへ」と共に上昇したと捉え（一三〇頁）、侵入による恐怖から征服による見かけ上の平穏へと変わったことよって被侵入側の元の住民たるローマ人が得た「平和の代償」（一〇六頁）として「新しい主人とともに働く」（一一〇頁）状況においては、侵入民と被征服民との間の「相互の順応のプロセスは、元の住民にとっては苦痛であり、長い時間がかかったはず」で、その元の住民が「非常に貧しい状態のままに」あつたことは第二部で示すという（一三四頁）。実際に第一部では、明らかに考古学的成果とわかる内容は、「ウアルスの敗北」跡地の調査成果に関する記述（六九頁）ぐらいと言つていいだろう。新資料が出てこない古代史学の難しさを感じさせる一方で、資料が増加の一途を辿る考古学への期待を高めさせる。

第二部では、第五章で、文献史学とは異なる考古学的アプローチへの導入を図る。物的資料も、土中で朽ちる有機質のように断片的であれば、それに基づく復元は思い入れ（*imagination*）次第で洗練や複雑さの度合いも多様になるが（一六八頁・図一・四・図五・八）、無機物は朽ちない。そこで、土器や瓦などの手工業生産品を素材にして考古資料の着眼点や取扱いをわかりやすく解

説し、それらが経済的側面などの検討のための歴史資料として雄弁なことを説く。主に、日常生活に直結する土器で手工業水準と流通状況を、高級感と耐久性という特徴を備える瓦で住環境と手工業生産システムを、そして物々交換からの解放を促した貨幣で物流システムを、遺物の具体提示(図五・五七・一〇)や単一時期の空間的物量比較(同・三・四)を交えながらそれぞれ考察する。動産たる遺物は、物流という経済活動の実態を語るに好都合で、産地が特定できるならなおさらである。

第六章では、図示資料は遺構・遺跡(≠不動産)へとシフトするが、それも前半部にとどまる。考古学的証拠は「何が、いつ起こったのかを伝えてはくれるが、それ自体ではなぜ変化が起こったのかについて説明してはくれ」ずに(一八三頁)どう変化したかを示せるまで、という考古学の弱みを承知しているからで、後半では文献史学の成果が積極的に活用される。

第七章では、前半で、第五章での論調から一転して考古資料に基づくデータへの無邪気な依存に警鐘を鳴らし、資料未検出時の解釈の難しさを指摘するが(二〇五―二〇九頁)、それでも、検出資料を扱うこと自体の有効性を再度訴える。そして、考古学的調査などで得られる不動産・景観データを、第五章と同様にローマ期とポスト・ローマ期で比較するが、ここで提示される図は、通時的な数量対照を意図したものが多し(図七・一・三・四)。後半は、第一部と同じく文字資料に基盤を移すが、ここでの文字資料には考古学的調査で得られる木板文書(「木簡」)や金石文も多く登場し、すなわち文献史学と考古学との資料的融合が果たされる。さらにここでは、文献資料の定量分析的手法による研究成果

も紹介されるので(二四一―二四二頁)、資料操作面でも両分野の仲が意識される。なお、第二部の導入で示された考古学の利点ないし資料解釈の前提は、アペンディクスで、(遺漏が補われるというよりもむしろ)再確認が促される。

西洋古代史が専門ではない評者は、文献史学と考古学の二分野を相手に多大な労力を払いつつ、各種引用文献について邦訳済みのものを補記する配慮を見せる訳者に、本当に頭が下がる。確かに、遺跡や陶器に関して、調査区(trench)や遺物コンテナ(industrial container)、胎土(fabric)や整形・調整(refinement)、出土情報注記(mark)や保管(storage)といった用語に慣れ過ぎた考古学側の者としては、溝や工業用コンテナ、素材や精製、印つけや貯蔵といった一般名詞的な訳語に違和感を覚えるが、本書が「読みやすいものとなつて」いるよう謎めいた学術表現も避けたいという著者の意図(二二頁)を踏まえてか、訳者も、本書が「読みやすいものになりえて」いるよう腐心したことは(二八六頁)、全体を通じて十分伝わってくる。実に読みやすい。

一方で、訳者の南雲氏は、考古学者自身でさえ時には意識から外してしまう考古学の理論的負荷性(すなわち、考古資料を観察する際にも、これまでに形成されてきた理論がレンズとなつてしまふ状況)を承知して、「歴史家に期待される役割のひとつは、たとえ考古資料そのものの検討が不可能であったとしても、それを扱う考古学者の思想形成や分析視角を注意深く吟味すること、換言すれば、考古資料から考古学者の「解釈」を剥ぎ取り、「解釈」の性格を明らかにすることを通じて考古資料に接近し、それ

によって考古学者との対話の基礎を提供すること」と述べていた。<sup>④</sup> また、日本の西洋古代史研究者のローマ考古学への取り組みという点では、「考古学者以外の人々の間に、考古学研究に対する批判的意識を高めること」を最重要目的として刊行された『ローマ経済の考古学』<sup>⑤</sup>が、本書邦訳の一五年前に邦訳されていた。こうした点を踏まえ、本書第二部以降の、量的な比較の際のデータ提示方法を見ながら、「剥ぎ取り」を試みよう。

例えば、分布 (distribution) 図とは、対象資料を確認した事実を示すだけのドットマップだが、著者は、「サンプルや地点がひとつだけの情報は常に疑ってかかる必要がある。しかし、多くの発掘によって一致するパターンが生み出されると、これらは信頼可能なように見え始める」とし(二六八頁)、その解釈へ進む。

考古学者は一般に、分布状況から流通 (distribution) という経済的活動を論じる場合には、先史時代であれば生産地からの距離に応じて物量が減少するという通説を想定し、分業体制の維持が可能となり生産や物流の複雑化に耐える消費力がある社会・時代であれば、すなわち多くの場合において歴史時代と見なしえる時代では、物量と生産地からの距離との間に単純な反比例関係を必ずしも見出せない場合に再分配の仕組みを意識する。本書でローマ時代の陶器の分布図が用いられるのは、本文からは用途がわからない三世紀のオックスフォード産製品では、飛び地分布を意識しつつも基本的には出土遺跡が生産地周辺地域に収まる地元ないし地域的調達品を示す文脈(図五・一三)、一世紀頃のフランスの(ラ・)グローフザンク産の良質食器の分布図では、帝国西

方規模で展開した一大産業を示す文脈(図五・一四)、二世紀のコルチエスター産の播り鉢ないし捏ね鉢の分布図では、二点以上出土した遺跡が複数遺跡も飛び地分布をしている点を踏まえてマーケットが複数あったことを示す文脈(アペンディクスの図二)、であった。それぞれで、著者の意図が少しずつ異なっているし、出土点数を問うか問わないかで議論する内容も異なるが、地図に落ちるドットは、研究の蓄積に応じて単純増加するので、分布域は必ず広がり、一定空間内での密度は必ず高まり、ともに小さくなることはあり得ない。こうした図に基づく「分布」を、「流通」と読み替える議論は、流通網の細かさや広さが更新され続ける故に、当時のネットワークがいかによくできていたかを再三語りがちになる。とりわけ、存否のみに基づくデータから展開される解釈の方向性には注意すべきである。

こうした分布図は、体系的な遺跡分布調査 (field survey) を行ったときにも、対象地域の年代別利用状況のイメージが浮かび上がるので、よく作成される(図七・一)。本来はより深い地層にあるべき先行する年代の資料が、後出する年代の資料よりも数多く表面採集される場合には、数量のない存否のデータだけでも説得力をもち得る。特に、年代決定に供する土器において、後出の時代の焼き物のほうが焼成が甘くて (lightly fired) 脆いならば(図五・一七)、遺物や遺跡を確認しづらくさせる一方で、それは土器の製作技術の低下を物語りもするので、二重に、衰退を語り得る。この点も、著者の「衰亡」論には好都合である。

しかし、存否にとどまらず出土点数の持つ意味がより大きくなると、どんなデータ提示をするか悩まされる。土器の個体数計算な

らば、保管問題から粗製無紋土器の胴部破片を水葬しても（一四一頁）、展開される議論では大きな問題ではないかもしれないが、古くから注目され詳細に報告される貨幣ならば、一桁の数字にまで相当に重みを持たせることがある（図五一九）。著者は、ボスト・ローマ期の東方でも貨幣使用が継続してことを示すグラフでは、自身も発掘に携わり調査面積も大きいイタリアの都市ルーナなどとの比較に、今回は、かつて用いた調査面積の小さいシリアの小規模村落デヘスのデータ<sup>⑥</sup>でなく、大都市のアンテオキアのデータを採用した。

絶対値に左右されない議論をするには、相対比を用いるのが効果的な時がある。しかし、アンフォラすなわち大型水差形容器（Pithos）の年代別組成変化グラフで、イタリア産葡萄酒の動向を読み取る試みは（アペンティクスの図一）、おそらくオリブ油用なども含めたすべてのアンフォラにおける葡萄酒用の占有比を示している点と、イタリア産の内訳を細かく分類している点によって、焦点がぼやけている。図の解説文は、イタリア産葡萄酒の漸次退場を指摘するが、イタリア内の産地どうしの目まぐるしい浮沈や三・四世紀の葡萄酒全体の搬入減をイメージさせるもの、共和政から帝政への転換後にも二〇〇年近くイタリア産の占有比も葡萄酒全体の占有比も値に大きな変化はない。

量比の異同は相対的關係を示すがそれだけでは絶対量を示さないので、葡萄酒が一体どのくらい行き来していたのか実感させるには、量比算出根拠となった、既知のはずの資料母数がやはり不可欠なのである。仮に、母数が少ないなら、葡萄酒全体の不人気も考慮することになりかねないし、そもそも遺跡の別地点を発掘

した時に加算されるデータによって既往の組成比に甚大な変更もたらされることさえあり得る。上記の貨幣の例とも関わるが、遺跡を部分的にしか発掘していない時に、遺跡内の限られた地点でその遺跡やその周辺地域の状況を代表させるサンプリング戦略は、先史時代前半期のように比較的単純な社会が対象の場合にはおよそ許容されがただが、分業制や階層性が想定される社会を対象とする場合には、ある地点のある遺物の組成比が別の地点<sup>⑦</sup>のその遺物の組成比とはおよそ整合しない場合もあるので、本来的には相当な注意が要求される。

何らかの母数を示しても、相対比や平均値でのデータ提示ではトリッキーな場合がある。ウシの体高がローマ時代を境に中世初期では鉄器時代より小さくなることを示そうとした概念図では（図七一二）、確かに、遺跡数は鉄器時代が二一、ローマ時代が六七、中世初期が四九、と分析に十分な物量を扱っているように思わせるが、算出された値は、各遺跡の平均値を更に平均して適切な統計処理をしていない数字だというから、著者が正直にことわるように（第七章註六）、きわめて妥当だが目安（近似）ではない。

ところで、注意すべきからくりは、データ提示方法だけではない。考古学では、土の中から出てくる時のその出土状況情報こそ重要である。つまり、その資料がどんな性格の遺跡のいつの地層からどんな状態で他のどういった遺物と共に出土したのか、というコンテクストがその後の解釈の解像度や信頼度の鍵を握る。上記の貨幣使用を示すグラフ（図五一九）作成のための資料操作では、著者が、貨幣は正確な年代を与えられるし注目される故に数

量は詳細に報告されるがどの時期にどれだけ貨幣経済が浸透していたのかを把握するのは実は難しい(一七二—一七三頁)、と解説した通り、提示データの来歴に注意が必要である。著者は、貨幣使用を考察するには埋納遺構(Mound)の出土品よりも遺物包含層出土品(scattered finds)のほうがよいと説くが(第五章註三七)、そもそも貨幣の出土層位年代が造幣年代よりどれほど新しい時期までを含むのか、そこが問われる。この図にグラフ化されていないブリテン島のティンタジェルで、ローマ期の活動は低調であるにもかかわらずローマが撤退する五世紀初頭より古く四世紀後半に発行された貨幣が埋納された遺構が見つかったことについて、遺跡の活発な利用が見られるポスト・ローマ期の所産でなく、造幣年代に近いローマ期の所産の可能性さえ指摘する(一七〇—一七一頁・註三七)。資料解釈に至る慎重さの一方で、解釈の恣意性も垣間見える。

以上、考古学者の用いる考古資料そのものの検討は難しくても、このように資料の提示方法や来歴を吟味すれば、例えば、グラフで示された経済複雑性の概念図(図六一)にも、縦軸の積算根拠は?とトリックに容易に気づくだろう。また、考古学的な場面や成果は確かにそれだけで印象的だが(図五一・五・六など)、考古学的成果が前面に出る第二部の三つの章題の韻やアペンディクス題目の頭韻などトリックにも気を遣ったり考古学の視覚的効果に訴えたりして考古学のイメージ向上に心を砕き過ぎたか、考古学者としても研鑽を積んだ著者は、土器の重要性を説いた後に土器の図面でスケールを落とす過失によって(図五一七)、本質的部分での脇の甘さを露呈する。考古学の利点を再確認するア

ペンディクスにおいてさえグラフの年代軸に「0」年を用いた点ともども、考古学の資料やデータの提示において注意が行き届かなかったことを、残念に思う。遺跡や遺物の図や写真、そしてそれらの資料操作をまとめるグラフなどの図表の多用が考古学者らしさを感じさせるなら(二八三頁)、評者は、歴史ノンフィクション作品に贈られる賞に輝いた本書を手にする読者に、考古学者の注意力や慎重さが過小評価されないか、危惧する。

さて、ヨーロッパ古代(Antiquity)の考古学では、衰退といえ、写実的旧石器絵画も頭に浮かぶ。その消滅は、当初は退行と意識されたが、二〇世紀前半に経済史観から登場した新石器革命説が盛行し、おそらく写実主義から現代美術へという美術史の変遷の影響もあって、それを、文明化を歩む中での精神的・心理的変遷の異なる宗教的・文化的な移行のように捉える傾向が強い。それ故、同じ古代という枠組みでもその始まりではなく終わり(End)の研究において、一方で、「特に関心を持ってるのは経済的な変化が日常生活に与える影響」(一五〇頁)であって、「関心の中心である消費者の観点から」(二五九頁)生産と流通をうかがって、文化・宗教面の連続性よりも経済面の「破局」を議論の基盤に据える著者と、もう一方で、経済面の衰退よりも文化・宗教面の「変容」を重んじる「古代末期」論者とが対照される状況は、古代と言っても細別時期ごとに視点や解釈に違いがあり、しかも研究の展開の中でそれらの流行も移り変わることを感じさせ、ひいては時代区分論の意義を考えさせ、それはそれで興味深い。

また、マルクス主義の衰退による経済的側面の研究の低調傾向は、古代末期研究だけでなく歴史学全体の流れのようだが（二六〇頁）、考古学でもやや遅れて似た動きがある。特にアングロアメリカン世界では、経済や普遍性を重視すると共に客観性を求めデータの数量的提示や定量分析を進めたプロセス考古学が、八〇年代以来、観念や一回性を重視し当事者個人の主観や第三者の解釈多様性を説くポストプロセス考古学に強く批判された。それ故、ポストコロナアルな学界にあっても敢えて「文明」の語を持ち出して文化には洗練度の違いが存在すると公言し（二五五―二六六頁）、西洋人のアイデンティティに関わる古典古代の快適さ（第四―第六章）を再確認させる著者の論調に、評者も、「今なせよ」の疑問を拭えない。特に、スカーフ禁止法の翌年に刊行されたしまった本書に見え隠れする新保守的傾向は、ゲルマン民族による征服とアラブ人による征服におけるアイデンティティの変化の相違に関する議論（第四章末）に限らずとも、不安を感じさせる。不安は、我が国に目を向けても同様で、究極的には地理環境決定論に読めてしまう衰亡の素因の理解は（第三章末）、「三・一一」後の復興が遅れている中で訳書が登場してしまったため、歴史研究に関わる一人として気まずさを感じる。

歴史ノンフィクション作品には少々酷かもしれないこの書評は、評者の深読みによる苦言と杞憂の産物なのか。確認のためにも、大変読みやすい本書のご一読をお勧めしたい。

① 南雲泰輔「古代末期」研究と考古学をめぐる一動向—— Luke Lavan と「古代末期考古学」——「古代史年報」第八号、二九―四

四頁、二〇一〇年。

② 例えは、南川高志編「ローマ帝国の「衰亡」とは何か」『西洋史学』一三四号、六一―七三頁、二〇〇九年。

③ ビーター・ブラウン『古代末期の世界』（宮島直機訳）、刀水書房、二〇〇二年、全二四四頁。

④ 前掲註①文献の四三頁。

⑤ ケヴィン・グリーン「ローマ経済の考古学」（池口守・井上秀太郎訳）、平凡社、一九九九年、全四三四頁。この文献の二六頁が該当箇所。

⑥ Bryan Ward-Perkins, 2000, *Specialized production and exchange, in Carneron, A., Ward-Perkins, B., and Whitby, M. (eds.) Late Antiquity: Empire and Successors, A.D. 425-600. (The Cambridge Ancient History XIV)*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 346-391. この文献の三五六頁の図一四が該当箇所。

⑦ 例えは、次山淳「古墳出現期の社会と土器の移動」『史林』第九七巻第一号、七―三五頁、二〇一四年。この文献の一八―三三頁が該当箇所。

(B6判 二八六―四九頁 二〇一四年六月)

白水社 税別三三〇〇円)

(京都大学文化財総合研究センター助教)